

量子力学 10 講 復習ノート

2022 年 6 月 4 日

1 第 9 講 運動方程式

今までは、測定に時間がかからない（一瞬で行われる、物理量に影響がない）状況で、測定する前後の一瞬を考えてきた。しかし現実の系は当然時間変化する。これを定量的に扱うことを考える。^{*1}

1.1 時間発展演算子

まず時間を進める演算子 $\hat{U}(t)$ を導入する。ここで $\hat{U}(t)$ はユニタリであることを要請する： $\hat{U}(t)^\dagger \hat{U}(t) = \hat{I}$ 。次の性質がある。

$$\begin{aligned}\hat{U}(t)\hat{U}(s) &= \hat{U}(t+s) \\ \hat{U}(0) &= \hat{I} \\ \hat{U}(t)^\dagger &= (\hat{U}(t))^{-1} = \hat{U}(-t)\end{aligned}$$

上から、「 t の経過と s の経過を合わせると $t+s$ の経過になる」、「初期状態は変化をうまない」、「逆演算は逆向きの時間経過」という意味。

1.2 シュレディンガー描像とハイゼンベルグ描像

量子系の時間変化の記述には、シュレディンガー描像とハイゼンベルグ描像という、二通りの流儀がある：

シュレディンガー描像 状態が変化、物理量は不変。

ハイゼンベルグ描像 物理量が変化、状態は不変。

シュレディンガーとハイゼンベルグは、同時期に別々に上記の描像を発表した。これらは同値な結果を与える。

シュレディンガー描像では、状態が変化し、それは次のように表される。

$$|\psi(t)\rangle = \hat{U}(t) |\psi(0)\rangle$$

^{*1} 教科書とは異なる順序で議論を組み立てる。自主ゼミで発表した。得られる結果は変わらない。

このとき物理量の期待値は

$$\begin{aligned}\langle \hat{A} \rangle_t &= \langle \psi(t) | \hat{A} | \psi(t) \rangle \\ &= \langle \hat{U}(t) \psi | \hat{A} | \hat{U}(t) \psi \rangle \\ &= \langle \psi | \hat{U}(t)^\dagger \hat{A} \hat{U}(t) | \psi \rangle = \langle \psi | \hat{A}(t) | \psi \rangle\end{aligned}$$

と表される。一行目の式がシュレディンガー描像，三行目の式がハイゼンベルグ描像を表している。

1.3 シュレディンガー描像

1.3.1 確率の保存

まず，Born の確率公式を使って考察してみよう。時間変化を含めた Born の確率公式は以下ようになる。

$$\mathbb{P}(|\chi\rangle \leftarrow |\psi\rangle) = |\langle \chi | \psi(t) \rangle|^2 = |\langle \chi | \hat{U}(t) | \psi \rangle|^2$$

これは，初期状態 $|\psi\rangle$ が時刻 t には状態 $|\psi(t)\rangle$ に変化して，そのときに $|\chi\rangle$ に瞬時に遷移する確率を表している。ここでは $|\chi\rangle$ を時間によらず一定にとったが， $|\chi\rangle$ も $|\psi\rangle$ とともに時間変化させるとどうなるだろう？時刻 t においてこの確率は以下ようになる。

$$\mathbb{P}(|\chi(t)\rangle \leftarrow |\psi(t)\rangle) = |\langle \chi(t) | \psi(t) \rangle|^2 = |\langle \hat{U}(t) \chi | \hat{U}(t) \psi \rangle|^2 = |\langle \chi | \hat{U}(t)^\dagger \hat{U}(t) | \psi \rangle|^2 = |\langle \chi | \psi \rangle|^2$$

つまり，遷移先の状態もともに時間変化させれば，確率は保存される。

1.3.2 シュレディンガー方程式

量子系の状態変化を記述する運動方程式，シュレディンガー方程式を要請する。

$$i\hbar \frac{\partial}{\partial t} |\psi(t)\rangle = \hat{H} |\psi(t)\rangle$$

ここで \hat{H} はハミルトニアン (Hamiltonian) で，エネルギーの次元を持つ。ここでは，ハミルトニアンが時間に依存しない状況を考える。シュレディンガー方程式に $|\psi(t)\rangle = \hat{U}(t) |\psi\rangle$ を代入する。

$$i\hbar \frac{\partial \hat{U}(t)}{\partial t} |\psi\rangle = \hat{H} \hat{U}(t) |\psi\rangle$$

ここで初期状態 $|\psi\rangle$ は好きに決められるので，

$$i\hbar \frac{\partial \hat{U}(t)}{\partial t} = \hat{H} \hat{U}(t)$$

が必要。これは $\hat{U}(t)$ についての簡単な微分方程式で，初期条件 $\hat{U}(0) = \hat{I}$ と合わせてこれを解くと

$$\hat{U}(t) = e^{-\frac{i}{\hbar} \hat{H} t}$$

となる。ここで

$$e^{-\frac{i}{\hbar} \hat{H} t} = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{n!} \left(-\frac{i}{\hbar} \hat{H} t \right)^n$$

である。時間発展演算子には，ユニタリーであることを要請していた。これを確認すると，

$$\begin{aligned}\hat{U}(t)^\dagger \hat{U}(t) &= e^{\frac{i}{\hbar} \hat{H}^\dagger t} e^{-\frac{i}{\hbar} \hat{H} t} \\ &= e^{\frac{i}{\hbar} (\hat{H}^\dagger - \hat{H}) t}\end{aligned}$$

これが恒等演算子 \hat{I} に等しいので， $\hat{H}^\dagger = \hat{H}$ となる。つまり，ハミルトニアンは自己共役である。

1.3.3 エネルギー固有状態

ハミルトニアンは自己共役であるから、物理量を表しうる。実際、ハミルトニアンはエネルギーを表す物理量であり、その固有値が系のエネルギーとみなされる。ハミルトニアンを実際に構成して、具体的に固有値問題を解く（エネルギーを求める）ことは次章にまわして、固有状態のときについて考えよう。固有状態ということとは、すなわち状態ベクトルが

$$\hat{H}|\phi\rangle = E|\phi\rangle$$

を満たすということ。離散スペクトルならば、上式を満たすような固有ベクトルを集めて CONS が作れるので、このときは測定値は 100% で E になる。この固有状態の時間発展を考える。

$$\begin{aligned} |\phi(t)\rangle &= \hat{U}(t)|\phi\rangle \\ &= e^{-\frac{i}{\hbar}\hat{H}t}|\phi\rangle \\ &= e^{-\frac{i}{\hbar}Et}|\phi\rangle \end{aligned}$$

となる。ここで三番目の等号は e^z の定義を振り返ればわかる。これを利用して、他の（固定した）状態への遷移確率は、

$$\mathbb{P}(|\chi\rangle \leftarrow |\phi\rangle) = |\langle\chi|\phi(t)\rangle|^2 = |e^{-\frac{i}{\hbar}Et}\langle\chi|\phi\rangle|^2 = |\langle\chi|\phi\rangle|^2$$

となる。つまり、任意の状態への遷移確率は変化しない。この著しい特徴から、エネルギー固有状態は定常状態と呼ばれる。

1.4 ハイゼンベルグ描像

今までシュレディンガー描像で考えてきたが、ハイゼンベルグ描像を見てみよう。ハイゼンベルグ描像は、状態が不変で、物理量が変化するとみなすのだった。この物理量の変化というのは次のように表される。

$$\hat{A}(t) = \hat{U}(t)^\dagger \hat{A} \hat{U}(t)$$

ここで $\hat{U}(t)$ は時間発展演算子で、シュレディンガー描像でみてきたものと性質は変わらない。シュレディンガー描像で得られた結果 $\hat{U}(t) = e^{-\frac{i}{\hbar}\hat{H}t}$ を用いて、物理量の時間変化を求める。

$$\begin{aligned} \frac{d\hat{A}(t)}{dt} &= \frac{d\hat{U}(t)^\dagger}{dt} \hat{A} \hat{U}(t) + \hat{U}(t)^\dagger \hat{A} \frac{d\hat{U}(t)}{dt} \\ &= \frac{i}{\hbar} \hat{H} e^{\frac{i}{\hbar}\hat{H}t} \hat{A} e^{-\frac{i}{\hbar}\hat{H}t} - e^{\frac{i}{\hbar}\hat{H}t} \hat{A} e^{-\frac{i}{\hbar}\hat{H}t} \frac{i}{\hbar} \hat{H} \\ &= -\frac{i}{\hbar} \left(\hat{A}(t) \hat{H} - \hat{H} \hat{A}(t) \right) = -\frac{i}{\hbar} [\hat{A}(t), \hat{H}] \end{aligned}$$

これがハイゼンベルグ描像における基礎方程式で、ハイゼンベルグ方程式である。ここではシュレディンガー方程式からハイゼンベルグ方程式が導出された。

一方で、ハイゼンベルグ方程式を要請としてシュレディンガー方程式を導出することもできる。まず、ハイ

ゼンベルグ方程式から,

$$\begin{aligned}\frac{d\hat{A}(t)}{dt} &= -\frac{i}{\hbar}(\hat{U}^\dagger \hat{A} \hat{U} \hat{U}^\dagger \hat{H} \hat{U} - \hat{U}^\dagger \hat{H} \hat{U} \hat{U}^\dagger \hat{A} \hat{U}) \\ &= -\frac{i}{\hbar} \hat{U}(t)^\dagger (\hat{A} \hat{H} - \hat{H} \hat{A}) \hat{U}(t) \\ &= \hat{U}(t)^\dagger \left[\hat{A}, -\frac{i}{\hbar} \hat{H} \right] \hat{U}(t)\end{aligned}$$

ここで, ハミルトニアンが時間変化しないことを用いた. 一方で $\hat{A}(t) = \hat{U}(t)^\dagger \hat{A} \hat{U}(t)$ より

$$\frac{d\hat{A}(t)}{dt} = \frac{d\hat{U}^\dagger}{dt} \hat{A} \hat{U} + \hat{U}^\dagger \hat{A} \frac{d\hat{U}}{dt}$$

である. $\hat{U}(t) \hat{U}(t)^\dagger = \hat{I}$ から, この両辺を時間微分して,

$$\begin{aligned}\frac{d\hat{U}}{dt} \hat{U}^\dagger + \hat{U} \frac{d\hat{U}^\dagger}{dt} &= 0 \\ \hat{U} \frac{d\hat{U}^\dagger}{dt} &= -\frac{d\hat{U}}{dt} \hat{U}^\dagger\end{aligned}$$

となることを使うと,

$$\begin{aligned}\frac{d\hat{A}(t)}{dt} &= \hat{U}^\dagger \hat{U} \frac{d\hat{U}^\dagger}{dt} \hat{A} \hat{U} + \hat{U}^\dagger \hat{A} \frac{d\hat{U}}{dt} \hat{U}^\dagger \hat{U} \\ &= \hat{U}(t)^\dagger \left(\hat{A} \frac{d\hat{U}}{dt} \hat{U}^\dagger - \frac{d\hat{U}}{dt} \hat{U}^\dagger \hat{A} \right) \hat{U}(t) \\ &= \hat{U}(t)^\dagger \left[\hat{A}, \frac{d\hat{U}}{dt} \hat{U}^\dagger \right] \hat{U}(t)\end{aligned}$$

だから, 二通りの表し方を比較して,

$$\hat{U}(t)^\dagger \left[\hat{A}, -\frac{i}{\hbar} \hat{H} \right] \hat{U}(t) = \hat{U}(t)^\dagger \left[\hat{A}, \frac{d\hat{U}}{dt} \hat{U}^\dagger \right] \hat{U}(t)$$

これが任意の \hat{A} で成り立つのだから,

$$\begin{aligned}-\frac{i}{\hbar} \hat{H} &= \frac{d\hat{U}(t)}{dt} \hat{U}(t)^\dagger \\ -\frac{i}{\hbar} \hat{H} \hat{U}(t) &= \frac{d\hat{U}(t)}{dt}\end{aligned}$$

である. この微分方程式を解けば, $U(t) = e^{-\frac{i}{\hbar} \hat{H} t}$ がわかる. シュレディンガー描像では状態が時間変化する: $|\psi(t)\rangle = \hat{U}(t) |\psi\rangle$. これに先程求めた $\hat{U}(t)$ を用いて時間微分すれば, シュレディンガー方程式が出てくる.

2 10 講 調和振動子

古典力学からのアナロジーで, 量子力学でも調和振動子を考える. 古典力学の調和振動子の力学的エネルギーは, 位置 x と運動量 p , 角振動数 ω によって

$$E = \frac{p^2}{2m} + \frac{1}{2} m \omega^2 x^2$$

と表される。古典力学からのアナロジーで、これらをすべて演算子に置き換えたものをハミルトニアンとする。

$$\hat{H} = \frac{\hat{P}^2}{2m} + \frac{1}{2}m\omega^2 \hat{X}^2$$

ハイゼンベルグ方程式を考えると、運動方程式は次のようになる。

$$\begin{aligned}\frac{d\hat{P}}{dt} &= -\frac{i}{\hbar}[\hat{P}(t), \hat{H}] = -m\omega^2 \hat{X} \\ \frac{d\hat{X}}{dt} &= -\frac{i}{\hbar}[\hat{X}(t), \hat{H}] = \frac{\hat{P}}{m}\end{aligned}$$

この計算には正準交換関係 $[\hat{X}, \hat{P}] = i\hbar\hat{I}$ を使った。この運動方程式を解くことを考える。第一式に i をかけ、第二式に $m\omega$ をかけたものを足し合わせると、

$$\frac{d}{dt}(m\omega\hat{X} + i\hat{P}) = -i\omega(m\omega\hat{X} + i\hat{P})$$

となる。したがって

$$m\omega\hat{X}(t) + i\hat{P}(t) = e^{-i\omega t}(m\omega\hat{X}(0) + i\hat{P}(0))$$

両辺を比較することで解が得られる。

$$\begin{aligned}\hat{X}(t) &= \hat{X}(0) \cos \omega t + \frac{1}{m\omega} \hat{P}(0) \sin \omega t \\ \hat{P}(t) &= \hat{P}(0) \cos \omega t - m\omega \hat{X}(0) \sin \omega t\end{aligned}$$

次にハミルトニアンの固有値問題を考える。ここで先程計算で利用した式を $\hat{A} = m\omega\hat{X} + i\hat{P}$ とおく。すると、

$$[\hat{A}, \hat{A}^\dagger] = 2m\hbar\omega\hat{I}$$

となるので、これが \hat{I} となるように係数を付け足したものを新しく \hat{A} とおく： $\hat{A} = \frac{1}{\sqrt{2m\hbar\omega}}(m\omega\hat{X} + i\hat{P})$ 。 $[\hat{A}, \hat{A}^\dagger] = \hat{I}$ である。これを用いて \hat{H} を書き直す。

$$\begin{aligned}\hat{H} &= \hbar\omega \left(\hat{A}^\dagger \hat{A} + \frac{1}{2} \hat{I} \right) \\ &= \hbar\omega \left(\hat{N} + \frac{1}{2} \hat{I} \right)\end{aligned}$$

ここで $\hat{N} = \hat{A}^\dagger \hat{A}$ とおいた。ハミルトニアンの固有値問題は \hat{N} の固有値問題を解くことに置き換わった。 \hat{N} と \hat{A} の性質は次のようになる。どれも簡単な計算をすればわかる。

$$\begin{aligned}[\hat{N}, \hat{A}] &= -\hat{A} \\ [\hat{N}, \hat{A}^\dagger] &= \hat{A}^\dagger\end{aligned}$$